

## 高校1年生

# 生命と環境Ⅱ つながり・広がり・生き方を求めて

山 崎 辰 雄・西 川 陽 子  
鈴 木 善 晴・三 島 徹  
丹 下 容 子・加 藤 容 子

**【抄録】** 高校1年では、自らの興味・関心に基づく学習活動と学び合いの場として、生命と環境に関する総合学習を行った。テーマ設定・追究活動・フィールドワーク・研究集録という1年間の取り組みの中で、自らの興味・関心や適性に向き合うことによりキャリア形成力を育てることをねらいとした。個人研究という形態をとりながら、実は他者とのつながりを実感しながら自分探しをする学習過程の一端を振り返りつつ、実践の反省・考察を行う。同時に、当時名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究員(現同大学院生)で本校卒業生でもある安達仁美さんの「総合人間科の実践研究」のフィールドとしての1年の取り組みを、その研究過程や評価を交えながら報告する。

**【キーワード】** 生命と環境 キャリア形成 テーマ設定 問題意識形成 意識のゆらぎ フィールドワーク  
研究集録 ふりかえりアンケート

### 1. 学年テーマと目標について

本校の併設型中高六カ年一貫カリキュラムは、1-2-2-1の構造をなし、それぞれを「入門基礎期-個性探求期-専門基礎期-個性伸長期」としている。六カ年を貫く柱としての「総合人間科」において、専門基礎期1年目に位置づけられる当該学年のメインテーマは「生命と環境Ⅱ」である。個性探求期1年目にあたる中学2年で「生命と環境Ⅰ」を学ぶ附属中学出身者80名に、新たに総合人間科を経験する高校入学者41名(体験入学者1名を含む)を加え、121名で本年度のスタートをきった。

「生命と環境」というテーマで総合的な追究活動を展開するにあたり、次の学年目標を設定した。

- ①自らの興味・関心に基づく学習活動を通して、主体的な「学びの姿勢」を学ぶ。
- ②生命と環境に関する知識や理解を深める。そして教科の枠ではとらえきれない課題や社会的かつ総合的課題を追究する。
- ③自ら学び行動する追究活動や、他者と関わりながら学びを深める活動を通して、自分の興味関心や適性に向き合い、進路を考える足場をつくり、キャリア形成力を養う。

これらを実践するための考え方として、「学ぶ意味・学び方・学び合いからの成長(生徒向けガイダンスより)」を意識し、1年間の活動が「自己発見・自己拡大・自己実現」へと発展していくことを願い、次のようにサブテーマを設定した。

つながり・広がり・生き方を求めて

### 2. 学習方法と指導体制について

学習活動は隔週木曜5,6限を基本として設定されている。これに加えて、学校行事を利用して意識を高め知の共有を図ることや、長期休業を利用しての生徒個人の取り組みを通してより積極的な追究活動ができるように学習機会を設定した。興味関心を軸とする個人研究という学習形態と、学校行事や教科学習と連動して進めていく1年という期間は、自分に向かい他を広く深く考えるスタンスを生徒に発現させる。それをサポートする体制として、担任と副担任のペアでクラスを指導すること、テーマをおおまかに「生命」と「環境」の2つに分け、担任と副担任がそれぞれを指導するようにした。

個人研究においては、メディアを利用したり他者の考え方を見聞きする時期を経た上で、自分の興味関心を十分意識したテーマを設定することをスタートする。その後、文献やインターネットなどによる追究活動を行う。それを基にフィールドワークを行い、研究を深める。最後に、「集録」と呼ばれるレポートにまとめながら、自分の研究を発信し、学びの姿勢を個性伸長期にむけて強化・発展させていった。

### 3. 1年間の活動経過について

1年間の活動内容については、次項(表1)に示す通りである。

前年度と今年度の大きな違いは、授業時間帯が、土曜3,4限から木曜5,6限に変わったことである。

## \* 総合人間科 1年間の活動経過

(表1)

回・月日	内 容	場 所
1回 4/11	目標・年間計画・テーマ例（ガイダンス） 2001研究協議会ビデオ紹介・作文	5限 武道場 6限 図書室
2回 4/16	中学での総合人間科の取り組みを紹介 林間学校の説明・下見報告	第1総合教室
3回 4/25	林間準備（事前準備）「生命と環境」に関する新聞記事のまとめ	H R
4回 5/9	林間準備（事前準備・事前学習）	H R
5/22～24	林間学校（分科会・クラス討論・利き水・ 勘八不燃物処分場見学）	茶臼山
5回 6/20	テーマ設定・研究計画設定	H R 図書室
6回 7/11	テーマ・研究計画発表会（クラスごと） 事前学習・プレFW&FW計画（ワークシート）	H R 図書室 第2総合教室
夏休み	11月FW計画案作成 ワークシート完成・プレFW報告	
7回 9/5	FW先候補決定 個人研究・事前学習	H R 図書室 第2総合教室
8回 9/26	FW先事前調査 個人研究・事前学習	H R 図書室 第2総合教室
9回 10/10	FW計画完成（訪問先・アポ取り・行程）	H R
10回 10/17	FW準備（依頼状・質問事項）	H R
11回 10/24	特別講義「フィールドワークの心構えと実際」 名古屋大学 助教授 柴田好章先生	図書室
12回 10/31	FW準備（質問事項の確認・直前指導）	H R
11/12	FW	
13回 11/14	札状・FW報告書作成・FWまとめ	H R
14回 12/12	FW報告・研究経過報告会	H R
12/18	特別講義「数学に作ろう」名古屋大学 副総長 伊藤正之先生	第1総合教室
冬休み	ワークシート完成	
15回 1/6	研究経過報告会その2・集録原稿作成	H R
16回 2/6	高2沖縄研究旅行 グループ研究報告会	H R
17回 2/13	学年研究発表会 A組・B組	第1総合教室
18回 2/20	学年研究発表会 C組 集録完成	第1総合教室
19回 3/13	評価・感想	H R

## 4. 1年間の学習過程・指導過程とその考察

ここでは、高校1年生が「生命と環境Ⅱ」という大テーマに取り組んだ1年間の過程を「テーマ設定期」「フィールドワーク期」「研究集録期」の3つのタームに分けて、研究的視点からみた指導過程と生徒の学習過程を報告したい。なお、この1年を通して、本校卒業生でもある安達仁美（当時名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究員、現同大学院生）は、総合人間科の授業を毎回観察・記録し、学習過程を詳細に研究した。その分析結果等も引用しながら、1年間の過程とその考察について述べる。

## (1) テーマ設定期

まず、4月11日のガイダンスから、7月11日の個人追究テーマ発表会までを、「テーマ設定期」として、その流れを追ってみる。

総合学習のもつねらいを理解し、学習の動機付けを行う題材として、2001年度に行われた研究協議会のパネルディスカッションの様子をビデオで紹介した。また、学び合いの意味を共有するために、附属中学出身者が中学2年の時に行った研究の一端を報告する会を行い、そこに5月22日～24日の林間学校の下見報告会とガイダンスを並列させた。

4月25日の授業で、「生命と環境」に関する新聞記事をみつけ、キーワードに注目してそのニュースソースを自分の切り口でとらえて要約し感想を書く”という課題を提示した。

この課題で生徒がとりあげたキーワードを一覧にし、それを分類して、林間学校で行う「クラス討論」のテーマを決定した。

5月22～24日の林間学校で、体験を通して学習の方向

を模索し、体験を共有して学び合いをすることを目的とし、次の4つの企画を行った。

- ①勘八不燃物処理場見学
- ②矢作川水源地探索と「利き水」
- ③クラス討論会（パネルディスカッション）  
A組「自殺」 B組「クローン」と「遺伝子」  
C組「クローン」

#### ④分科会

- 花祭り・そば打ち・バードウォッチング
- またぎとハイキング・五平餅作り・魚釣り

特に、クラス討論会では、各クラス4～6名のパネリストからの報告に対して、様々な視点の質問・意見が飛び交い、生徒達も自分達の企画・運営によって学びを深めていくことの楽しさの一端を味わったようであった。

以下、5月30日に行ったアンケートの結果を載せておく。（数値は%を表す）

企画	1	2	3	4	5
不燃物処分場	3	26	39	19	13
水源地探索	10	39	40	9	2
利き水	24	49	24	2	1
分科会	46	23	24	5	2
クラス討論会	20	40	32	4	4

1：とても楽しい（ためになる） 2：楽しい 3：ふつう  
4：つまらない 5：とてもつまらない

この5月30日の時点での研究テーマについて言及のあった生徒は121人中76人（63%）であった。ここまでの指導の中に、メディアを利用することによる興味関心の自己分析と、それを利用したパネルディスカッションによる問題意識の共有と広がり、そして体験的活動によるテーマ設定への支援を組み込んだ。このことは強い連続性をもつものではないが、問題意識の形成やテーマ設定に関与した要因としてとらえることができよう。

その後、個人研究テーマを決定し、7月11日にクラスでそのテーマや動機・ねらいなどを発表する「個人研究テーマ発表会」を開いた。

「テーマ設定期」における、3時点（4/25新聞課題・5/30林間学校後アンケート・7/11テーマ発表）で生徒が挙げたテーマの関連性を分析した安達の研究（柴田・安達2003）では、生徒がテーマを設定する「時期」と決定までの「問題意識の連続性とゆらぎ」について言及している。

また、問題意識の形成に関与する要因をつきの9つに分類し、分析している。（表2）

（表2） 問題意識の形成に関与する9つの要因の類型

学習経験の要因	1. 中学校での学習経験
	2. 林間学校での経験
	3. 4/25新聞課題での内容
生活経験の要因	4. 日常生活の経験
	5. メディアからの影響
	6. 他者との関わり
内面的要因	7. 以前からの関心
	8. 将来の夢
	9. 自分の悩み

その他、興味深いデータとして、附中出身者の約7割が、林間学校の段階でテーマの方向性を決定している。これに対して安達は、「中学校での類似した学習経験が個人研究テーマの早期決定に繋がる」ということが考えられる」と述べている。

逆に、高校からの入学者の約6割が、7月11日の段階までテーマに関して揺らいでいる。これは、「総合人間科」の授業に初めて触れ、個人研究を体験することとなるため戸惑いを感じやすいためであり、さらに、「自分の興味、関心や問題意識を認識する必要があり、その結果、個人追究課題の設定に時間がかかった」と考えられると安達は解釈している。

また、7月11日の段階で、将来の進路に関わってテーマを設定した生徒が約5割いた。キャリア形成との関わりを十分意識して授業を進めることの重要性が浮き彫りになる数値ととらえてよい。

「問題意識の形成には、一要因だけではなくいくつかの要因との相互作用が考えられる。よって、より詳細なデータをもとに他要因との関連性を明らかにし、より構造的に問題意識の形成過程を見ていく必要があるだろう」と安達はまとめている。授業者は、生徒のもつ問題意識の形成要因を意識しつつ、そこに問題意識のゆらぎがあることを踏まえて、そのテーマ設定と研究方針に対して適切なアドバイスを心がける必要があるだろう。

#### (2)フィールドワーク期

個人研究テーマを決定した後、フィールドワークを軸とした追究活動を行った。まず、個人研究テーマと、フィールドワーク訪問先の一覧を以下に示す。（次項表3）

## 個人研究テーマと主なフィールドワーク先 (表3)

研究テーマ	フィールドワーク訪問先
子供と音楽 ~可能性を探る~	ドルトンスクール幼稚園
ペットと人間	名古屋大学医学部環境医動物学
スポーツが人に与えるもの	千種スポーツセンター
たばこ・環境への影響・吸う人の心理	名古屋大学医学部附属病院公衆衛生学講座
ウィリス動脈輪閉塞症～もやもや病～	藤田保健衛生大学病院
水とアザラシ	鳥羽水族館
心理学 ～癒しと環境～	緒あしすの会
国際交流	愛知朝鮮中高級学校
介護保険	名古屋市健康福祉局高齢福祉部介護保険課
未来の地球環境	名古屋大学大学院地球科学専攻
親の心、子の心	愛知県立大学児童教育学科
Care ～医療現場とは～	愛知医科大学看護学部
スポーツの心理	名古屋大学健康保健センター
家電リサイクル ～パソコン編～	富士通環境本部（資料のやりとり）
幼児虐待	名古屋大学医学部精神科 親と子の心療部
犬・猫がもつ病気	名古屋大学医学部環境医動物学
精神病	よつば相談室
障害児教育	名古屋市児童福祉センター
動物実験	名古屋大学理学部生物学科
児童虐待	名古屋大学医学部精神科 親と子の心療部
依存と習慣	名古屋大学教育学部
テロ	名古屋大学法学部
児童虐待	名古屋大学医学部精神科 親と子の心療部
ストレスが身体に及ぼす影響	名古屋大学農学部共同研究1号館
ひきこもり	よつば相談室
BSE	名古屋大学農学部応用生命化学
Brain	名古屋大学医学部附属病院細胞生理学
きき手について	名古屋大学環境学科
アスペルガー症候群	希望の会幼児学齢部p・pの会（一般家庭）
野生動物の希少化	東山動物園 動物会館
美容界での生き方	愛知美容専門学校
森	名古屋大学農学部資源環境学科森林生態生理学研
環境とデザイン	林英光先生宅（愛知県立芸術大学教授）
電気	中部電力西名古屋火力発電所
人の人に対する美的感覚について	愛知美容専門学校
スポーツ心理学	名古屋大学健康保健センター
犬＆猫の病気について	こざわ犬猫病院
癌 ～治療法とその最前線～	名古屋大学医学部脳神経外科
分子進化学	名古屋大学理学研究科分子神経生物
絶滅寸前のメダカ	東山動物園 動物会館
地球温暖化と南極生態系への影響	名古屋大学環境学科地球水環境センター
地球温暖化	名古屋大学環境学科地球水環境センター
言葉の重み～人と人とのかかわり方～	名古屋大学言語文化学部
メディアと人々の生活の結びつき	名古屋大学情報文化学部情報メディア教育センター
自殺の価値	愛知県精神保健福祉センター
靴と健康	コンフォート・アイ（靴店）
再生医療について	名古屋大学理学部生命理学科
薬剤の開発	資料による学習
帰化植物—naturalized plant—	東山植物園
クローン人間のはず	愛知県農業総合試験場
笑～わらい～	吉本興業（吉本会館） 金城学院大学人間科学部
漢方療法	内藤記念くすり博物館
Biotechnology	イチビキ本社
Medicines～新薬開発～	名古屋市立大学薬学部薬化学分野
飛行機が環境におよぼす影響	名古屋大学環境学科地球水環境センター
クローンについて考える	名古屋大学法学部231号室
薬が製造されるまで	大正製薬・大塚製薬
水質汚染～堀川の汚染と浄化～	名古屋市緑政土木局河川部堀川総合整備室
スポーツ栄養学	千種スポーツセンター
臓器を見る	名古屋大学医学部第2外科学教室

研究テーマ	訪問先
汚染～生物そのものの浸食～	名古屋大学理学部生命理学科
なぜ少子化は進行し続けるのか？	中村日赤病院産婦人科
自殺とマッサージと薬	中和医療専門学校
片頭痛と薬への依存	名古屋市立大学薬学部薬化学分野
肌～老化・ストレス・活性酸素～	資料による学習
患者の支えー看護師と介護師ー	辻村外科病院 東海病院
スポーツと障害	千種スポーツセンター
心の病気	福智クリニック
骨～体を支える各部分と病気～	名古屋大学医学部附属病院整形外科
未熟児～健康とケア～	名古屋市立大学病院
ゴミ問題とリサイクル	千種環境事業所
教育に見る女性差別	ウィン女性企画事務所 中島美幸先生宅（淑徳短大講師）
乳児の健康と食事	さくら助産所
性同一性障害	紺仁病院
マイクロマシン	名城大学理工学部
親子の絆～児童虐待～	名古屋大学大学院教育社会研究室
品種改良～ヒトの都合で変わる動物～	名古屋大学農学部応用遺伝講座
尊厳死	名古屋大学医学部附属病院老年科
人と音楽	金城学院大学人間科学部
東海大地震～災害にそなえて～	資料による学習
色と木とコンクリート	名古屋大学環境研究科都市環境学
メディア～真実とプライバシー～	中日新聞社 西枇杷島役場
極めよ、神の一手	広路囲碁棋院
宇宙進出～スペースデブリ～	名古屋大学博物館
摂食障害～傷ついた心～	名古屋大学医学部精神発達臨床科
人体の冷凍保存	名古屋大学医学部医学系研究科
愛知万博	愛知県万博推進委員会
スポーツについて	津田体育専門学校
動物とヒトとの関係	資料による学習
ネット犯罪とセキュリティ	千種警察署
日本の食糧事情	名古屋大学農学部地域資源管理講座
盲導犬について	中部盲導犬協会
ドラッグ～薬のすべて～	名古屋大学医学部附属病院薬剤部
睡眠と健康	睡眠館オーガニック
中生代の自然環境	年代測定センター
児童虐待について	名古屋大学医学部精神科 親と子の心療部
人の心理一人はこのときどう思うのかー	名古屋大学環境学科 (留学中)
寿命	名古屋大学医学部附属病院薬剤部
アレルギーについて	名古屋大学工学研究科電子情報専攻
日本と韓国の食文化	愛知県農業総合試験場作物研究所
米の品種改良	愛知県立大学文学部児童教育学科
子供と一緒に成長する	名古屋大学理学部生命理学科
最先端医療	名古屋大学社会環境工学科 辰巳邸
バリアフリー	株式会社豊田中央研究所
エンジン	愛知県精神保健福祉センター
S t i m u l a n t 「薬」	名古屋大学博物館
世界神話に於ける精神の共通	名古屋中央教会
男と女について	名古屋大学医学部附属病院眼科
眼について	愛知淑徳大学現代社会学部地域社会
地域社会と子どもの結びつき	愛知県精神保健福祉センター
薬物の効用そして副作用	名古屋大学教育学部
心理 治し	四つ葉相談室
音楽と人間	名古屋大学医学部附属病院薬剤部
血液製剤	中部盲導犬協会
盲導犬は天寿を全うできるのか	津田体育専門学校
スポーツ～スポーツが及ぼす影響～	しのぎ動物病院
人と動物との絆	名古屋大学大学院環境学研究科
環境～地球のその後～	東山動物園 動物会館
ブリーディングローン～種の保存～	四日市市役所 環境保全課
地球の温暖化	

夏休み中の追究活動を受けて、9月以降にFW先生の検討が本格的に始まった。質問事項やアポイントメント取りなどの場面での指導に活躍したのは、本校国語科が2002年度に編纂した、「国語表現テキスト」であった。この中に本校の総合人間科の年間学習に必要なスキルがワークシート形式で掲載しており、書き込みながら自分の作業が確認できるというすぐれものである。

また、10月24日に、名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授の柴田好章助教授に「フィールドワークの構えと実際」という題で特別講義をしていただいた。この内容を大いに参考にし、いよいよ生徒は11月12日午後にフィールドワークを実施した。

総合人間科の中核的学習であるフィールドワークが、学習の進展や進路意識の形成にいかなる意味を有しているのかを分析した、安達の研究では、抽出生徒のフィールドワーク前後のインタビュー調査を行い、「研究テーマ設定動機」「フィールドワーク先決定までの過程」「フィールドワークでの学習内容」を明らかにしながら、「フィールドワークの意味」に迫っている。

安達は、特徴的な3人の抽出生徒について、次のような内容で、「フィールドワークの意味」をとらえており、以下に記述する。

#### ① (“性同一性障害”をテーマにしたM)

「将来の進路という点ではかかわりの無いテーマではあるが、追究している問題状況に自ら深くかかわるようになり、この問題を追究する者としての責任感も芽生えている。また、フィールドワークを契機に新たな問題意識が芽生え、それが新たな学習へと繋がっている。」

#### ② (“心の病気”をテーマにしたH)

「臨床心理士という憧れの職業の本質を知り、さらにキャリア意識を強めた点に、Hにとってのフィールドワークの意味があると考えられる。」

#### ③ (“未熟児”をテーマにしたB)

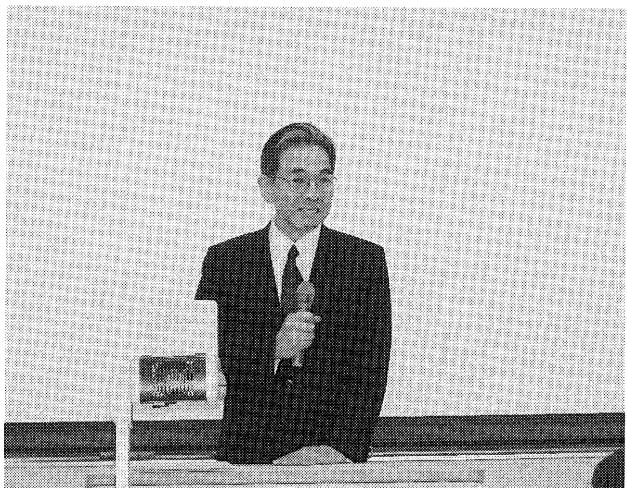
「看護士になることを意識していたBは、フィールドワーク先の病院の医師から専門的な知識を学びたくさんの知識を得たことに満足感と達成感を得ている。反面、その世界の現実の厳しさを知り、そこに自分を照らし合わせたところ、キャリア意識に揺らぎが生じた。漠然としていた夢が、フィールドワークを通して現実的な形となり、自らの生き方を考えるきっかけとなった。」

生徒は、このフィールドワーク期で、多くの試練を乗り越えようとする。この学習が、様々な場面を通して生徒に成長を与え、更なる学習への芽生えときっかけを与えていく。一方、キャリア意識は強まるだけとは限らず、揺らぎや見つめ直しを迫る場面も現れる。また、学習の方法や意識に対して猛烈に反省を迫る場面も登場する。しかし、そうしたすべてのことが次へのきっかけとなるところがフィールドワークという自ら組み立てる体験学習の効用である。一見マイナスと思われることを、

長い目で見てプラスに転換できる、というスタンスを常に持ちながら、生徒のキャリア意識をゆっくりと育てていく心のゆとりを指導者は忘れてはならないであろう。3年間というスパンを念頭に置いたフィールドワーク期の指導や助言が、特に強く求められると感じる。

年を跨いだが、12月12日と1月6日に各クラスでフィールドワーク・研究経過報告会を行った。

また12月18日に、伊藤正之副総長の特別講義を行った。「数学に作ろう」というテーマで、数学という学問の特性や本質、ひいては学びのもつ意義までを、インパクトのある具体的な例を用いてわかりやすくお話しして下さった。



さて、年度末に行った「総合人間科 ふりかえりアンケート」の中から、フィールドワーク期に関わるもの特徴的な結果の一部を以下に示す。

[ ] 内は平均値である。

1：まったくあてはまらない

2：あまりあてはまらない

3：どちらともいえない

4：だいたいあてはまる

5：非常によくあてはまる

平均値が3.5以上のものを太字で表しておく。

## 「2002年度総合人間科 ふりかえりアンケート」より

\*フィールドワーク（以下FWと記述）に関する以下の項目について、どの程度あてはまりますか？

- |                             |                                 |
|-----------------------------|---------------------------------|
| (1) FW先を考えるのに苦労した [3.1]     | (2) FW先を決める際に先輩の訪問地を参考にした [1.6] |
| (3) アポイントをとるのに苦労した [2.8]    | (4) アポイントをとるのに緊張した [3.2]        |
| (5) 質問を準備するのに苦労した [3.3]     |                                 |
| (6) FWへ行く前には十分に準備を行った [3.0] |                                 |

1	2	3	4	5	B	s u m
12	30	26	31	14	7	120
10.0%	25.0%	21.7%	25.8%	11.7%	5.8%	100.0%

- (7) FWへの期待感は高かった [3.5]

1	2	3	4	5	B	s u m
12	14	19	41	27	7	120
10.0%	11.7%	15.8%	34.2%	22.5%	5.8%	100.0%

\* 1年間の学習の軸でもあるFWに対して期待は大きいが、事前準備に関しては満足感があまり得られていない。学習時間も不十分な印象がある。

- (8) FWに行く前に緊張した [3.6] (9) FWでは準備した質問を十分にすこことができた [3.3]

- (10) FW先では思っていたよりも多くの話がきけた [3.8] (11) FW先の人は好印象だった [4.1]

- (12) FW先の施設に興味を感じた [3.3]

- (13) FW後に事前学習の不十分さに気づいた [3.6]

1	2	3	4	5	B	s u m
9	17	17	38	30	9	120
7.5%	14.2%	14.2%	31.7%	25.0%	7.5%	100.0%

- (14) FWによって新しい疑問や問題が発見できた [3.6]

1	2	3	4	5	B	s u m
8	13	19	42	29	9	120
6.7%	10.8%	15.8%	35.0%	24.2%	7.5%	100.0%

\* FW自体に満足感を得る生徒が多く、裏返して素直に事前学習の内容を反省することができる。同時に、次への学習要素をつかむことができるところに、FWの魅力がある。研究の軸としてFWをとらえており、有意義に感じる生徒が多い。

- (15) FWはあなたの研究にとって有意義だった [3.9]

1	2	3	4	5	B	s u m
10	6	15	35	45	9	120
8.3%	5.0%	12.5%	29.2%	37.5%	7.5%	100.0%

- (16) FWはあなたの研究にとって満足のいくものであった [3.6]

- (17) FWは今後の自分の進路を考えるのに役立った [2.8]

1	2	3	4	5	B	s u m
25	25	23	19	19	9	120
20.8%	20.8%	19.2%	15.8%	18.8%	7.5%	100.0%

\* FWと進路との関連性については強い傾向が現れていない。

- (18) FWによって価値観が変わった [2.9]

- (19) FWによって人生観が変わった [2.5]

- (20) FWをこれからも続けていきたい [3.5]

1	2	3	4	5	B	s u m
8	9	35	34	24	10	120
6.7%	7.5%	29.2%	28.3%	20.0%	8.3%	100.0%

\* FWという学習形態に一定の評価を与えている

- (21) FW先を決める際に誰かに相談した [2.9]

- V (1) FWの行き先を決める際に誰と相談しましたか。（複数回答可）

先生 同級生 先輩 親 兄弟 その他 なし

1	2	3	4	5	6	7	s u m
35	37	1	15	3	5	45	120
24.8%	26.2%	0.7%	10.6%	2.1%	3.5%	31.9%	100.0%

\* 教員と同級生に対して5割の生徒が相談をしている。親との相談も1割ある。

テーマ設定からFWの行き先まで、他者とのかかわりを大切にしながら研究を進める姿勢を常に授業者は意識したい。

### (3)研究集録期

ワークシート作成形式で進めた1年間の個人研究レポートを、研究集録という形にまとめる。他の生徒への研究の発信・共有という意味で重要な作業である。

2月6日に、高校2年生に総合人間科で取り組んできたことを発表してもらい、特に、来年度も行われる予定の「沖縄研究旅行でのグループ研究」についてイメージ作りを行った。同時に、先輩達の発表の工夫や、学んだことを発信することを楽しむ姿を見て、総合人間科が学年進行として学びの継続性をもっていることを再認識した。

2月13日と2月20日に、学年研究発表会を実施した。各クラス2～3名の代表生徒の発表が行われた。そのテーマは次の通りである。

A組「環境を考える」～リサイクル・タバコ～  
パソコン部品のリサイクル  
タバコの環境への影響

B組「生命を考える」～臓器・クローン～  
臓器移植の実態・クローンの人権

C組「“生きる”意味を様々な観点から見つめる」  
死生観・再生医療・子供

さまざまなテーマの中に、「生きる」ということがどこかで繋がっていることを実感することができた。

各個人で1年間の研究をまとめた「研究集録」は、470ページを超えた。3月13日にその完成品を手にしながら、「総合人間科を通して考えたこと」を文章にした。同時に、前述した「ふりかえりアンケート」を行った。以下に、生徒の感想とアンケート結果のいくつかを紹介したい。

### 5. 1年間を振り返って

#### 「総合人間科を通して考えたこと」より（3月13日）

・総合人間科を通していろいろな経験をしてきたことで、自分の夢の実現が少しだけ近づいたと思う。今、自分がしたいのは、光合成を利用し、酸素を作り、副産物のでんぶんをエネルギー源として使うことである。現実的には不可能に近い。しかし今できなくても自分が研究できるようになればいい。総合人間科を通して自分の夢が具体的になった。（K・S君）

・1年間「薬」について調べ、将来につながる研究ができたと思います。もし、総合人間科がなかったら、詳しい内容を知らずに進路、将来の夢を決めていたことでしょう。（K・Mさん）

1年間の主体的学習によって「夢」という言葉を語ることができるところが、教科学習とは違うところかもしれない。しかし、このキャリア意識を普通教科に反映させるところまで高める必要がある。

・「虐待とはどういうものなのか」私はこの1年間、それまで全く知らなかった児童虐待について研究してきた。虐待の実態を知り、それは人とのつながりがあれば防ぐことができる。私が今回総合人間科で学んだこと、それは「つながり」だ。（S・Mさん）

・1年間総合人間科をやってきて、自分の知識が増えたことは確かだけれど、「1つのことを深く考えていない自分」に気づかされました。自分には関係ないとか、興味がないとか思っていたことを今まで何も考えていないかったけれども、みんなの研究内容を知っていくうちに、そんな甘い考えじゃいけないと思いました。他にも、人間の根本的な存在理由や意味や命の大切さを考えるよいきっかけになりました。（N・Sさん）

研究過程や学び合いの中から、「つながり」を感じ、共生を実感するコメントも多く見受けられる。個人研究が、他者との関わりを十分意識するところまで成熟していく様子が伺える。

・はじめて総合人間科をやって、なりゆきでやってしまった感じはある。けど、テーマ自体は自分に興味あることだし、もしかしたら将来の自分の仕事に関わってくるかもしれないし、後悔はしていない。答えが出せないものだから総人がいいもの、わるいものどっちかとははっきり言えないけど、ちがう道もあるって教えてくれたひとつのチャンスになったと思う。（S・Mさん）

・ざっくばらんに言えば、倫理的問題は本来解決を望める種類の問題ではない。10人いれば10人なりの命に対しての考え方がある。「これが正しい」といった形で答えを提示するのではなく、個人がそれぞれ自分なりの確固たる生命観を確立すればよいのである。世の中にある問題、物事すべて答えがあるわけではない、ということを答えない教科「総合人間科」で学んだ。（Y・S君）

多面的なものの見方にたどりつき、「答えがない」ところに魅力を感じる生徒も多い。ある時点で学びを終わらすことなく、先につながる意欲を引き出すような指導が望まれるところであろう。

・僕にとっての総合人間科の最も大きな失敗は、「その進行にはたらくな強制力が弱い」ということだ。強制力のなさが取り組みの雑さとなり、様のない結果を残すことになった。

だが、これは詭弁であり、本当にだめだったのは僕自身だった。総合人間科はもともとムチをふるわないものであり、そのこと自体が授業だからである。そして、この思考と反省こそが僕にとっての「総合人間科」であり、僕は小さいながらも一歩前に進むことができたと思う。来年こそは、この授業を受けるに値する生徒になりたいものだ。（U・M君）

自分の学習の姿勢を、「反省」を通してより強固なものにしていく意識が感想文の中に随所に現れる。こうした「スパイラル・アップ」の意欲を、どのように次の研究につなげるかがとても大切であろう。

・私が総合人間科を通して学んだこと、それは「自分で行動し、自分で体感していくこと」の大切さだ。これは、「過程」「結果」そして「動機」すら重んじる勉学であると言えよう。

ただ、この総合人間科が存在することで、少し不安なところがある。それは、「ゆとり教育」の考えからきた、週5日制による授業日数・時間の減少である。総合人間科において、「自分のペースで体感し、学習する」一方、

他の科目ではそれが完全に失われ、机上での詰めこみ学習でしかない。この両者の不均衡にどう対処していくかが今後の学校教育に関わる重要な問題なのだろう。

(M・Yさん)

週5日制にともなう変化や、普通教科とのつながりについては、総合学習を精錬されたものへと発展させていく上で考えるべき重要なポイントである。生徒の感想から出てくるということは、よりスリムで自らを高める濃縮な授業であることを総合人間科が求められている証拠であろう。もちろん、授業者もこの点について常に求められていることを意識したうえで、指導過程を組み立てていく必要がある。

### 「2002年度総合人間科 ふりかえりアンケート」より

\* 1年間の総合人間科全体を通して、以下の項目についてあなたはどの程度あてはまりますか。

(1) 総合人間科の授業を楽しんで取り組めた [3.7]

1	2	3	4	5	B	sum
4	14	22	42	24	9	120
3.3%	11.7%	18.3%	39.2%	20.0%	7.5%	100.0%

(2) 他教科に比べて総合人間科の授業に負担を感じた。[3.2]

(3) 総合人間科によって価値観が変わった [3.2] (4) 総合人間科によって人生観が変わった [2.9]

(5) 総合人間科は将来の生き方を考えるのに役立つ [3.7]

1	2	3	4	5	B	sum
7	13	18	40	33	9	120
5.8%	10.8%	15.0%	33.3%	27.5%	7.5%	100.0%

(6) 今年学んだことを来年の総合人間科につなげたい [3.3]

(7) 今後も総合人間科を続けていった方がよい [4.0]

\* 1年間総合人間科の授業に意欲的に取り組めた [3.6]

\*中学出身別の質問

- 《名大附属中学出身》 (1) 中学の時に行った研究がテーマ設定に影響した [2.5]
- (2) 中学校で行った研究よりも発展した研究ができた [3.8]
- (3) 中学校の総合人間科が役立った [3.1]

- 《他中学出身》 (1) 総合人間科について入学前から知っていた [3.6]
- (2) 附属中学出身者からアドバイスをもらった [3.3]
- (3) 中学校で類似した学習（個人研究）を行った [2.5]

## 6. まとめ

総合学習が世に広まり、週5日制が導入され、教育を取り巻く社会情勢がダイナミックに動きだしている。FWをより洗練されたものにするためのシステムづくりや、指導方法の工夫・普通教科との関連強化などが要求されるであろう。そして指導者のゆとりと授業者の意識をシンクロさせることで生み出される人間成長の喜びをいつも感じる「総合人間科」であることを期待する。

## 7. 引用論文・引用資料

- ・柴田好章・安達仁美（2003）。「高等学校の総合的な学習における個人追究課題の形成過程－名大附属「総合人間科」の実践研究－」。『中等教育研究センター紀要』第3号。名古屋大学大学院教育発達研究科。
- ・柴田好章・安達仁美（2003）。「総合的な学習におけるフィールドワークの意味～名大附属高校1年生における「総合人間科」を分析して～」中部教育学会第52回大会発表資料（於：信州大学教育学部）未公刊。